

売れた年でもある。

「東洋の魔女」の主将だった河西昌枝さんは向ヶ丘遊園に住んでいらした。時折、駅ですれ違ったが、わたしと目が合うとほほ笑まれた。わたしも「東洋の魔女」に会釈をした。たったそれだけのことである。しかし、

# 書けぬ裏話も本に

「ああ、常連ですよ」。床屋のとわかるそうである。いまは散髪も電気バリカンで家内にやってもらっている。床屋まで行くのが面倒くさい。あの色紙はまだ飾ってあるのか。巨人軍もすっかり若返りしてしまった。選手の名前すらわからない。高橋由伸監督がわたし

わたしを感動させた「東洋の魔女」が身近に住んでいらっしやるのがうれしかった。向ヶ丘遊園にはいろいろな人が住んでいる。行きつけの床屋にある鏡の前に巨人軍の選手の色紙が飾ってあるのにも驚いた。「この選手、来るんですか」となった人が読めば「わたしだ」

の舞台を見に来ていた時期がある。まだ学生であった。「へえ、わたしの演劇が好きなんだ」と喜んだが、なんのことはない、仲のいい女優さんがいただけであつた。「野球はやってますか」と聞くと「はい」とだけ答えた。愚問だった。ただ、直立不動だつたのがスポーツ選手らしくあつた。大学の後輩でもある。河西昌枝さんを駅でお見掛けしなくて久しくなつた。「どうされたのか」といぶかしがつていたら「2013年10月3日に脳出血で死去された」とゴシップ好きの劇団員が教えてくれた。河西昌枝さんは、目を覆うような奇烈な練習が続いた日々の中、結婚を先延ばしした鬼の大松へのささやかな抵抗として、爪を伸ばしていたそうである。3年先、また「東京オリピック」だそうである。どんな東洋の鬼や魔女が出現するのだろうか。やっぱり、2位ではないのか。もう「根性」だけで勝てる時代ではない。

(松浦市出身)